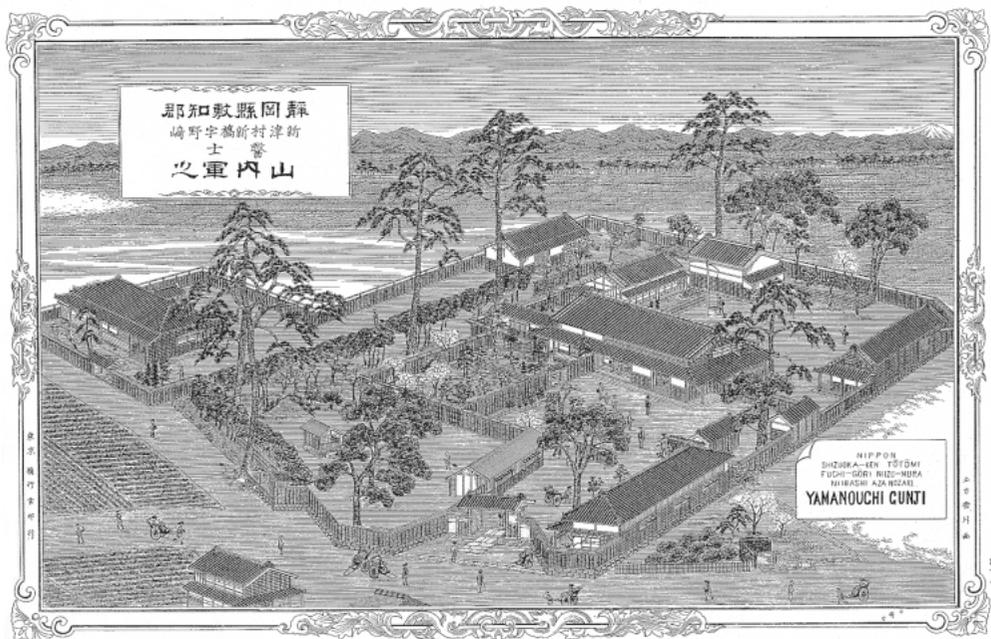


山内裕雄氏寄贈医書目録考

岩 崎 鐵 志

A Study of the List of the Edo-Period Medical Books Donated by Dr. Yamauchi Yasuo, Professor Emeritus at Juntendo Medical University



序

順天堂医科大学名誉教授山内裕雄先生におかれては、歴代の蔵書・什器類を浜松市に寄贈された。浜松市中央図書館・浜松市博物館・浜松市楽器博物館、および静岡県立大学短期大学部図書館がこの恩恵にあずかることになった。本学の場合も早くに受納していたのであるが、その目録が整理されないままに大層に遅延し今日に至った。本学が寄贈をうけたものは近代文学関係の全集類と医書である。

ところで、平成12年度をもって本学の2学科は廃学科となり、短期大学部は静岡市小鹿の地に存立することになった。本学を基礎とする静岡文化芸術大学が新設されて、教員及び図書備品等の一部が移行することになった。そのために山内氏寄贈の図書は新設の大学図書館に移行

することになったので、急遽稿本を作成する事にした。山内氏におかれてはかくも遅延した事に心穏やかならぬものがあつたであろう。ここに遺憾の意とともに改めて寄贈を受けた事への感謝の意を表明するものである。

本稿の冒頭に掲げた銅版画は、『日本博覧図・静岡県』（明治25年刊、浜松市立中央図書館蔵）所収の山内軍之邸図であり、山内資雄氏寄贈医書に見える山内軍之その人の屋敷図である。しかも、東京・大阪での勤務医を経て先祖の地に戻り、その開業直後の景観であると思われる。

山内家の家譜に接していないので正確な点を欠くが、文化3年、浜松藩主井上正甫が村尾董覚（村尾元融の実父）を藩医に採用した時、その学僕が山内蒙済であり（内田旭著『遠州の先賢村尾元融』）、このたびの寄贈医書の中に山内蒙済自署の蔵書がある。その後が山内軍之である。

明治22年8月、内務省衛生局が刊行した『日本医籍』（順天堂大学医史学研究室山崎文庫）には、「敷知郡新橋村 山内蒙済 山内軍之」と、両者が併記されている。また、大正14年の『日本医籍録』（医事時論社刊）には、「山内蒙済 新津村新橋 安政3年1月生 明治17年登243号 同17年開業」とある。すなわち、この山内蒙済は大正14年時点で70歳であり、明治17年に医師免許登録がなされ、同年開業とある点から、当然ながら文化3年時点で村尾董覚学僕の蒙済とは同一人物ではない。恐らくは蒙済を襲名した軍之であろう。その襲名時期は不明ながら、山内軍之の婚姻記事は、岡村龍彦著『岡村父祖事蹟』（254、233頁）に記されている。

この明治17年という年紀は、山内軍之の経歴にとっては重要である。すなわち、このたびの寄贈医書の中に山内軍之自署の写本があり、その識語から次の事情が判明するからである。つまり、明治10年の東京府病院受業生としての勉学の状況を窺わせる記録類があり、「大阪府病院方符業録」（No61）には、「明治十七年甲申暮夏 静岡県下遠江山内軍之」の自署があり、その年には実家に戻っている事が判断できよう。つまり、大正14年『日本医籍録』の記事に相当するであろうし、襲名一件も推測できよう。

次が明治33年生まれの子孫の山内蒙済である。すなわち、昭和10年の『日本医籍録』（中部版）には、昭和3年に日本医大専門部を卒業し、東大医学部等の勤務医を経て、昭和5年に開業した事が記されている。なお、銅版画での住所氏名のローマ字表記は誤記である。当地での称呼は、「シンズムラ・ニッパシ・ノサキ、ヤマウチゲンジ」である。

銅版画は山内邸内外のロケーションをよく写していると思われる。すなわち、画面上部は東西に貫通する東海道の松並木、北東に富士山、屋敷の西側には田畑が広がり、近世の地図に見える海道南側の大沼池も描き込まれ、邸内には亭々とした松樹が見える。この松樹は遠州灘で漁をする地元漁師の目印であったというが、現在もその名残をとどめている。

山内家は現在の浜松市新橋町で江戸時代後半頃から開業した医家であり、遠州地方ではその声望は高いものがあつた。『日本博覧図』でも門の右手に病棟、母屋右半分がどうやら診察室であるらしく、人々が向かっている。また人力車7台。人力車は明治2年に東京で発明されて以来、利用者の社会的地位を象徴するハイカラな乗り物であるので、本銅版画の主要な構成要件の一つとして、『日本博覧図・静岡県』の編纂と出版についての書誌的考証の中で詳述した事がある（『浜北市史』、通史下巻、第2章、平成6年刊）。

この銅版画に表現されているのは、山内家歴代が地域の医療を担ってきた事から生まれる声望であろう。併せて山内家が近隣の医家相互の子弟教育や婚姻関係を形成する事によって、広く遠州地方の文化形成に関与している事が、名望家としての構成要件であつたものと思われる。

それ故にこの山内氏寄贈医書を精査する事によって、広く近世東海道宿駅の文化、更には近代の地方都市の文化の伝播と定着の過程の一斑が明らかになる事を願うものである。

本稿では医書タイトルの後に型の大小を記した。大本とは美濃版大をいい、小本とはB6版相当をいう。刊写の二別にて登録したが、必ずしも成立年紀の順にはなっていない。

また、寄贈医書について参看する便宜上、小曾戸洋氏著『日本漢方典籍辞典』によって、該当書名番号（ページ）の順で注記した場合もある。他方、簡単な書誌を記したが、正式のそれでもない。この目録稿本は作成者自身の備忘録にすぎない。諒とされたい。なお、図書整備の細部の調整は本学図書館司書加藤泰宏、今田雅子両氏に託した。近代文学関係は既に整理済みである。

刊本の部 書名・書誌

- 1 十四経絡和語鈔（外題） 1冊 刊本 大本 岡本一抱撰 元禄6年刊
書誌 （内題）「十四経絡発揮和解」（巻一～巻六）
小曾戸本 305（179）
- 2 合類広益靈宝薬性能毒大成 巻九 1冊 横 小本 正徳5年刊
小曾戸本 651（380）
- 3 医方大成論（端本） 1冊 刊本 大本 孫允賢著
書誌 目録によると、全七十二方（風～疹痘）を収めるが、本書はその第一冊目に相当し、風（一）から五痺（廿六）迄を収める。
小曾戸本 72（45）
- 4 東洞先生遺稿 上中下 3冊 刊本 吉益東洞
小曾戸本 509（296）
- 5 傷寒論 巻第一～巻第五 巻第六～巻第十 2冊 刊本 大本 奥付刊記なし
書誌 題簽外題には「宋版傷寒論」とある。本書最後の丁（第十の十八丁オ）に、この所有者のものらしい朱筆の署名花押「維（花押）」がある。傷寒論は日本漢方典籍における大名題にて、小曾戸本での言及は多いので、ここでは列举しない
- 6 傷寒論国字解 巻一～巻八 2冊 刊本 雲林院了作注解 明和8年刊
書誌 巻一～巻七、合本されている。
小曾戸本 333（197）
- 7 錦囊外療秘録 1冊 刊本 大本 林子伯撰 明和9年刊
書誌 『国書総目録』には「外治方鑑」（二巻図録一卷三冊）をとり、正徳5年、明和9年、天明4年、寛政7年の各版を記録している。処方内容は百一方を収める。
付録として「湿毒古方後世方経験良方」を収める。
本書の刊行趣旨は「付言」に記されている。すなわち、「癰疽脹ハモトヨリ下疳便毒五痔楊梅瘡等近世瘡毒家名医ノ秘セラルル良方ヲ探り求メテ病論治法ヲ記シ膏薬油薬針灸迄秘密口伝洩サス集ム外治病症一切モルル事ナシタトヘ素人タリトモ此書ヲ以テ療治セハ治験如神」という。
付録の題名は、標題には「古方後世方」と明記してあるが、当該部分の冒頭には「湿毒一切経験良方」と記している。学派を問わぬ効験処方というわけであろう。
その出版趣旨には「三都会及諸国湿毒治験名医ノ家ニテ屢用ヒ試テ功験アル秘法ヲ搜

索シテ悉ク載之」とある。

本論の「錦囊外療秘録」の本文は漢文であるが、全文に振り仮名がつけられて、訓読されている。大衆治療法の指南書としての工夫が施されている。それ故に本書は美濃版大の版型や袖珍版などの各種の、「錦囊」を冠に付けた類似の医書に至るまで、再販刊行されてベストセラーとして世上に流布したものと思われる。他方、この種の病気が世上に蔓延していたであろう事は想像に難くない。

それにもかかわらず、本書に収載された挿し絵の人物像は、中国人の風俗を示している。そこに近世医学書出版に伏在する問題点がみえている。すなわち、中国の古典を根拠とし、形而上形而下に至るまで、あらゆる中国の文物を尊崇するという近世学問の構造が顕在化しているのである。現実の読者・患者は日本人であるにもかかわらず、原理が優先していることがわかる。この他にも家相や方位を説く出版物にあっても、その居屋敷の図が中国風の建築物であるなど、枚挙にいとまあるまい。このような体裁のほう信用を得やすい事は想像に難くない。

しかしながら、医書では購買対象が不特定多数の大衆であるが故に、現実を補填するものとして、後者の付録の出版意図が説明される場合、三都の医家における効験を謳う記述が盛られる事になるのである。

なお、本書の裏表紙内側には所有者の署名「宇布見 山田玄良」がある。

小曾戸 206 (121)

- 8 疝癥積聚編 1冊 縦 刊本 大橋尚因 安永7年刊
書誌 自序(安永七戊戌春三月、張州海西 大橋尚因)、跋(安永七年龍集戊戌夏五月、張藩医官滕惟寅撰)

本書名では小曾戸本にみえない。

- 9 叢桂偶記 全二巻 2冊 縦 刊本 水戸藩医原南陽 寛政12年(序文・跋文)
小曾戸本 450 (263)

- 10 赤水先生文稿 上下 1冊 縦 刊本 五島赤水 文化3年刊
書誌 寛政7年(跋文)、文化3年(奥付) 五島恵迪(赤水)については小曾戸本 325 (192) 参照。『国書総目録』参照。本書名では小曾戸本にみえない。

- 11 漫遊雜記 卷上(端本) 1冊 縦 刊本 永富独嘯庵 文化6年再版
書誌 山内蒙濟藏書印「遠浜城南新橋觀古堂」(朱方印)

小曾戸本 623 (366)

- 12 医道便易 上巻 1冊 縦 刊本 小本 平沢随貞 天保2年刊
書誌 全2冊のうちの上巻のみ。

本書名では小曾戸本にみえない。

- 13 瘍科秘録 一卷~五巻(端本) 5冊 縦 刊本 本間玄調 天保8年(自序)
書誌 全10巻12冊のうち、5巻5冊のみ。

小曾戸本 665 (388)

- 14 華氏病理摘要 一~四 4冊 縦 小本 刊本 ハーツホーン著 長谷川泰訳
明治8年刊 長谷川泰蔵版

- 15 病院經驗方府 卷一卷二 2冊 刊本 横 小本 文部少教授高橋正純
明治6年刊 明治5年(自序)日新亭蔵版

- 16 講筵雑誌 第一号第二号 1冊 (合綴) 刊本 縦 小本 満任著 坪井信良編
 明治8年 活版 東京府下病院出版 島村利助刊
 書誌 本書は合綴されている。『国会図書館蔵書目録・明治期』第4編には未載か。
 内扉標題には、「英国外科教師満任氏講述、講筵雑誌、第一号、明治八年九月、東京府下病院出版」とある。「明治八年十二月」の第二号も同様である。奥書に相当する箇所、第一号には「明治八年九月 東京府下病院編者坪井信良誌、印刷 竹内拙三、発兌書林 東京馬喰町貳丁目 島村利助」とあり、第二号も同様である。
 本文は活版印刷であるが、挿図として銅版印刷による「ローセス氏解剖真図」1枚と術前後の図2枚、計3枚が挿入されている。なお、「満任」が「満任屈」とも表記された事は、以下にみる山内軍之筆写本を参照されたい。
 所有者署名の山内軍之は、「軍事外科心得」(No58)の記事によれば、明治10年の時点では東京府病院にて勉学中である。西南戦争勃発に際し、外人教師に従軍医養成の使命が課され、その講義録の筆録者が「受業生山内軍之」である。「カルロツト氏薬物学」(No57)の冒頭にも、「於東京府病院教官藤田正方訳講、生徒山内軍之筆記」とある事からも判明する。
 なお、山内軍之の明治10年以前の医学修業については不明である。
- 17 内科簡明 巻二 1冊 縦 小本 刊本 日耳曼摺設原撰
 石川櫻所・石黒忠恵・林洞海訳 (内題) 明治9年刊 島村利助刊
 書誌 原著者は、カール フェルディナンド クンツェ。全25冊のうちの1冊のみ。翻訳者は『国会図書館蔵書目録・明治期』では林洞海のみを訳者とし、『日本医事大年表』では石川・林の2名をあげている。
- 18 漢洋病名対照録 上下、付録 1冊 刊本 落合泰藏著
 明治15年 島村利助刊 活版印刷
- 19 華氏内科摘要 巻一卷二巻四 3冊 刊本 ハーツホーン著 桑田衡平訳
 書誌 全22冊のうちの3冊のみ。山内家蔵書としては2セットあったようである。現在は2セット共に端本である。両者を区別するのに、ここに登録するような奥付に発兌書林(山城屋佐兵衛・丸屋善七・島村利助)のみを記す刊本と、次ぎの番号で登録するように、桑田衡平蔵板者を奥付に記す刊本とによって区別することにした。
 なお、ハーツホーンについては、阿知波五郎著『近代日本の医学』(思文閣出版)に詳しい。
- 20 華氏内科摘要 巻二巻四巻十六巻二十 4冊 刊本 ハーツホーン著
 桑田衡平訳 島村鼎閱
 書誌 全22冊のうちの4冊のみ。奥付に「東京薬研堀町 桑田衡平蔵板」の刊記がある。発兌書林は前者と同様である。ただし、その記載順序に変更があり、島村・丸屋・山城屋である。江戸時代の慣行からすると、蔵板者の権利の確立があったわけであるから、書林の版権の持株数に変化があったことが推定される。
- 21 医療方針 1冊 縦 刊本 小本 ジョン ミルネル フォセルギル著
 広瀬桂次郎訳 明治22年刊
 朝香屋書店刊

写本の部 書名・書誌

- 22 (覚書) 1冊 縦 写本 山内蒙済筆写
書誌 標題はないので仮に覚書としておく。その内容は書状案文、年貢収納、漢籍読書抄記、医書抄記、漢詩応酬などの記事である。特に「御役人中様」とした書状案文のなかに、差出人山内蒙済の署名が記されているので、筆者をそのように特定してよいかと思われる。

医書抄記の例として、「ワートル薬性論」一覧抜粋が記され、別の箇所にはその販売所である江戸須原屋の住所が記されている。「蘇魯林曹達」「結麗阿曹達」「阿仙薬錠」「幾那」「依蘭苔」「牛胆」「橙皮」「桂精」「鎮痙剂」「羯布羅」「琥珀」「亞的兒」「麻醉剂」等の薬剤の処方と効能記事がある。また、漢詩の応酬にはその当時浜松城下下堀村に居住していた寺西易堂と応酬した詩がみえる。その題に「癸亥初夏易堂君至喜賦」とあるから、文久3年の頃の覚書であることが推定される。

- 23 医字解 1冊 縦 写本 村井琴山著 山内理達筆写
書誌 本文4丁。表紙に「西肥邨井先生著」とある。著者は村井琴山(1773-1815)である。琴山は熊本に生まれ、上京して吉益東洞の門人となり、後に帰国して古医方に拠って治療活動を行い、熊本藩医に招かれた。

表紙見返しには「遠陽医生山内理弘達 花押印(桂園)」とあり、裏表紙見返しに、次のような重要な記事がある。すなわち、「村尾多聞先生受業以学医道、維時天保十一年庚子五月端午、予十四齡、山内寸人写之、印(桂園)」「遠陽河龍西永村、率章館塾従先生」という文章である。

これによって、山内蒙済・山内弘達という山内家の医業の師承が古医方の学統に属し、村尾多聞に弟子入りしていたことが判明する。また、村尾多聞の学塾が「率章館」と称したことはこれにて初見と言える。

村尾多聞とは村尾元融の実弟であり、この兄弟および永田村居住の村尾多聞について、および、山内蒙済が村尾元融・多聞兄弟の父、村尾董覚に師事していたことについては、内田旭による考証によって判明している(「遠州の先賢 浜松 村尾元融」、『続日本紀考証者村尾元融』、『内田旭著作集』二・三、所収)。なお、『浜北市史』通史上巻では、小松村村尾留器のカルテである「三省録」、村尾留器と村尾多聞との関係などについて記述しておいたので参照されたい。

本書名では小曾戸本にはみえない。

- 24 金瘡口訣 1冊 縦 写本 華岡青洲著 山内弘達筆写
書誌 奥書に「天保十一庚子年晩秋廿六日夜写終、予十四歳、山内弘達 印(桂園)」とある。また、裏表紙見返しにも「山内寸人写之、印(桂園)」とある。

小曾戸本204(120)、「金瘡口授」参照

- 25 扶歇蘭度神經熱經驗説 一 1冊 縦 写本 和蘭扭満訳 誠軒坪井信道重訳
書誌 フーフランドと坪井信道については、青木一郎の坪井信道研究に詳しい。

この写本には冒頭に「遠江引佐井伊谷岡田氏蔵書記」の朱方印が押捺されている。

- 26 扶氏經驗遺訓抜粋(含「經驗良方」) 1冊 縦 写本 筆写者不明
書誌 筆写内容は乏しくて、熱病総論の冒頭部分のみである。後半には、西脇秀挺著「經驗良方」が抄録されている。

「經驗良方」の箇所には、「春齡江馬先生閱 門人西脇秀挺撰 男江馬義信成校」とあ

る。

大垣藩医江馬春齡（襲名）については、江馬家文書研究会編『江馬家来簡集』（思文閣出版）を参照。また、次にあげる「(処方覚書)」(No.28)には江馬春齡の処方二点が採録されている。注目されるのは、それが蘭方であることであろう。

27 舌診口訣 1冊 縦 写本 山内弘達筆写

書誌 舌の色・形による診察の方法論とその処方を述べている。各条の下にはその出典として、津田玄仙著「療治茶談」の篇・丁が記されている。この写本の冒頭の箇条は、「外邪内傷舌診之區別、療治茶談二篇十六丁」とある。以下32条にわたって記述されている。

奥書には、「維辰天保十五甲辰年十月吉旦 於率章館山内理弘達写焉」とある。これによって、地方村落に居住する医者の子弟教育の実践的な内容の一端が推測されよう。なお、口訣とは口授の奥義（諸橋大漢和）、運用の要領（小曾戸本334頁）。

小曾戸本684(399)

28 (処方覚書) 1冊 縦 写本 筆写者不明

書誌 筆写内容は諸家の処方から抄記したものと思われる。冒頭は吉益東洞の「丸散方」から書き始めたものの、中断している。諸家の人名がみえるのを拾うと、「瘡毒之靈方、甲州八代郡坪井村百姓幸左衛門伝方」「小山忠兵衛湯茶方」「黒禾散斯徴旬治疥癬 江馬春齡」「紀州花岡家伝」「美濃江馬伝」「信州諏訪竹内新次郎」などである。なお、「斯徴旬」にはスウイテンと振り仮名がつけられている。

29 碧霞山人十難病論 東野山十難病治方 1冊 縦 小本 写本 山内蒙濟筆写本カ

書誌 本文中に、「桃花塩」という「道中用心之妙薬」の処方が「南峨堂一子相伝之内妙方集」にあって、「相伝の時金拾五両也」と記している。筆写者は字体から山内蒙濟と思われるが、これを支払ったものか否か不明である。

この記事の後に、「家方桃花塩」の効能を示す病症として、「第一きつけ、ふねのよひ、しゃくつかへ、腹のいたみ、水あたり、下り腹、痰、かせひき、其外諸病によし、数用で数功あり、可秘々々」とある。

その外にも、「未試方」として、「隔症或反胃症」の処方がきされているが、「南峨堂集中ニアリ可秘々々」とある所を見ると、先の「桃花塩」の場合と同様に、南峨堂にて勉強中にその医書を披見に及んだものと思われる。

この筆写者が勉強した師匠家と即断はできかねるが、本書の末尾に三人の師家の堂号が記されている。「保和堂 中村見泰先生堂号、南峨堂 国友三圭先生堂号、博愛堂 堀生民先生堂号」とある。また塾生仲間と思われる人名が七名、その前丁に記されている。「論云う傷寒十余日、中村元之助、吉松大介、上田玄武、拝郷縫衛、水野亀太郎、長尾相之助、拝郷虎之助」であるが、これらの者は傷寒論を勉強した仲間と見ると、その苗字からみて浜松藩の水野家家中の者がいるのではないかと思われる。水野忠邦の家中に拝郷縫殿、水野元亀という重臣がおり、儒者吉松泰八がいるからである。水野元亀以外は浜松詰である。三人の師家とこの人名とを結びつけると、あるいは三師家共に浜松において門戸を張った医者かもしれない。この七人の分限と三人の医学塾については後日に残す。

30 完齋雑録 1冊 縦 写本 筆写者不明

書誌 完齋についても不明。内容は「碧霞山人十難病治方」「一子相伝奇方録」「弁乳癌証

并治法草稿」「針ノ大事」「内外通薬」「薬性論」「薬種拵様之事」「天刑秘録」「脚気翼方」「翻胃集録」である。特に、「一子相伝奇方録」の記事の中に、「桃花塩」と「未試方」の二記事が記載されている。「碧霞山人十難病論東野山人十難病治方」にみえる、「桃花塩」等の記事との転写の前後関係、人間関係については不明である。

- 31 正文傷寒論 付眼科略説 1冊 縦 小本 写本合綴 筆写者不明
書誌 内題は前者は「正文傷寒卒病論集」、後者は同題であるが、その末尾に、「文化四卯五月 阿陽 安芸均撰」とある。この安芸均とは、中神琴溪の著作「生々堂傷寒約言」（文政3年刊）を編集した弟子である。したがって、この筆写者は吉益東洞門人の中神琴溪の系統、すなわち古医方の学統に属する者であろう。なお、両題の間に、「小児家」と題して「小児百日咳」等の処方が記されている。

本書名では小曾戸本にみえない。

- 32 (処方抄記) 1冊 横 小本 写本 筆写者不明
書誌 筆跡から見て複数人の筆跡である。

- 33 汲古堂方規 乾坤 2冊 縦 写本 筆写者不明
書誌 用箋「臨照堂蔵」を使用している。各冊共に上下に分かれているが、表記は外題に従った。乾部には上下の目録があるが、坤部には目録はない。特に坤部に収められている記事は、諸家の処方が摘記されたものとみられる。たとえば、その出典として挙げられた諸家ないし書籍を引くと、「金匱」「艮山方」「汲古堂方」「春林軒」「生々堂」「橘香堂」「東洋先生方」「備中鬼好庵」等であるが、長文の引用では、「後藤艮山先生口授病因考痘瘡名義録 痘瘡名義弁 酒湯之説」が収録されている。

本書の汲古堂主人は古医方に属す医者で、恐らくは浜松近在に居住するものと思われる。というのも先の諸家のうち、後藤艮山、華岡青洲、山脇東洋和歌山や上方の医師のほか、橘香堂の記事があるからである。橘香堂とは、遠江敷知郡白州村の医者、高部魯庵の内弟子教育の場を指す事は、内田旭による村尾元融研究の著書の中にみえ、外塾を青莪堂といったという。

高部魯庵は曾祖父村尾留謙の長男玄晏の子孫で、玄晏が村尾から本姓の高部に復した。他方、玄晏の弟董節が村尾を名乗り、この子孫から村尾元融が出た。高部魯庵（1760～1828）は京都・大阪・長崎で修業し、生家に戻り開業した。その著作「折肱秘録」のために朝川善庵が序文を書いた（「楽我室遺稿」所収）。しかし出版には至らなかったと、内田旭は推測している。『静岡県史』資料編文化七には、高部魯庵の肖像画を掲げておいた。

- 34 (「療治茶談経験家蔵方」抄記) 1冊 縦 写本 筆写者不明

- 35 (医書抄記) 1冊 縦 写本 山内弘達 三宅理立
書誌 筆写者は本書末尾に書かれた記事に従えば三宅理立であろう。しかしながら、そのように断定するには躊躇される。それは筆写内容と筆跡から躊躇される。

本文冒頭の記事は「外邪内傷舌診之区別、療治茶談二篇十六丁」とあって、先の「舌診口訣」と同じ文章が収録されている。しかも、「舌診口訣」と本書とは、共に同一の用箋を使用している。

前者はその奥書から筆写者が山内弘達であることは明白であり、本書のこの部分は同一筆跡、すなわち、「山内理弘達」である。もともと、「舌診口訣」の記述簡条と比べると、前者と本書との簡条内容には相互に抜き差しがあることがわかる。ただし、両書に

おける抄録原理については未考である。

筆跡の点から見ると、前者の「舌診口訣」の筆跡は、本書末尾の三宅理立の筆跡とは異なるようにみえる。もっとも、「舌診口訣」の末尾にある、筆録成立を示す天保15年の「山内理弘達」の本人と、本書末尾の「孝子理立」とが養子縁組によって、同一人物である可能性もあろう。諱の「理」が同一であり、「立」と「達」とは通じ合う事から、推定も可能であろう。山内家系図について不明であることから、ここではとりあえず別人としてみて、本書の筆録者を二人とし、何らかの理由から本書の貸借がなされて、三好菖軒の事歴が書かれるに至ったものとみなしておく事にする。

本書に引用された諸家ならびに医書を挙げると、

「療治茶談」（津田玄仙著、明和7年～文化6年刊）

「金鶏医談」（畑秀龍著、寛政12年刊）

「小児総論、牛山曰小児三歳ヨリ以下ハ脈を診スル事アラス、病アラハ男子ハ左、女子ハ右ノ手ノ虎口ノ三関ヲ見テ其病ヲ知ルヘシ（略）」（牛山とは香月牛山で、『牛山活套』（安永8年刊、小曾戸本163（98）参照）の「小児総論」からの引用であることを、深瀬泰旦氏の教示である）

「積山氏曰癩癩ハ（略）」（積山氏は未考）

「三宅氏曰近年小児内外所因ヲ知シラス（略）」（この文章の後に、「外台紫石湯」など石膏を多用する古医方の処方が続くので、三宅氏とは津田玄仙門人三宅実之と思われる。小曾戸本684（399）参照）

「子和云、儒門卷四第十論、夫癩病、（略）」「医統」（著者不詳、『国書総目録』にはみえない）

「医範提綱、初卷十丁、癩ハ腦中ニ於テ靈液自ラ鬱敗シテ、（略）」（宇田川玄真訳）

「和蘭薬鏡、卷六、キナノ部、幾奈ハ鎮痙ノ一薬トス、（略）」（宇田川玄真訳）

「西洋ノ諸説ヲ按スルニ癩癩ノ主薬ハ、幾奈、纈草、寄生、阿魏、橙葉、曼陀羅花、阿片ノ類也、宜シク本書ニ依リ考フヘシ」

「花岡先生青囊秘録ニ癩癩ノ治方数条ヲ載ス、今此ニ略ス、本書ニ就テ考フベシ」

「叢桂亭蔵方」（原南陽）

「小山忠兵衛湯薬方」

「春林軒蔵方」（華岡青洲）

「和剂局方」（『国書総目録』によれば、宇田川玄真訳、木村秀茂編（5巻）があり、未刊のままで転写されていた。浜松近在にも写本が流布し、村尾多聞の学塾率章館にも将来せられていたことが推定されるのである）

「中神」（中神琴溪の著書不明）

「天真楼蔵方」（杉田玄白）

「底野迦 依百」（テリアカ、イペー）

「久野氏」

「和蘭方」（「和蘭局方」と同書かもしれない）

等である。古医方や蘭方の著作に親しんでいることが判明する。

次に本書の抄録の構成上で特徴的なことは、「癩症門」という独立した項目を筆録者が立てている事である。その書体から見ると、山内弘達筆であろう。

その「癩症門」に収録された書目は、上記の書目のうち、「茶談」「積山氏曰」「三宅氏曰」「子和云」「医範提綱」「和蘭藥鏡」「西洋ノ諸説ヲ按スルニ」「花岡先生青囊秘録」であり、その他に処方名称が列挙されている。

その処方名は、「外台紫石湯」「銭氏五色丸」「控涎散、医統」「加味酸角湯、西洋、癩病卒時顛仆不省人事口吐涎沫、(略)」「橙葉散、西洋」「ラヨロス散、西洋、治癩癩」「曼陀羅膏、同治癩癩及産後失心、(略)」「寄生散、同、治癩癩、(略)」「加味白虎散」「阿魏角油丸、西、治癩癩、(略)」「加味四七湯」である。

この「癩症門」に挙げられた書目で特徴的な事は、宇田川玄真の翻訳書が挙げられている事である。癩癩などの治療として和蘭医学が最新の知見として注目されていたものと思われる。また、その治療の詳細について、「西洋ノ諸説ヲ按スルニ、(略)本書ニ依テ考フヘシ」という言葉で結ばれていることは、師匠の講義の口述を筆記したものと思われる。つまり、山内弘達や三好理立等が学んだ村尾多聞の率章館では、古医方の書目の外に、華岡青洲は言うまでもなく、宇田川玄真の諸翻訳書を学習していた事が推定されるし、師匠の口吻が伝えられているのかもしれないのである。

本書に限らず、また、山内家のような歴代の医家などに見られる蔵書の量は何を意味するのか、あるいは又、近世の医家やその弟子達が筆録する医書の抄録が広範に存在する事は何を意味するのか。それは刊本や写本を問わず、読書による知識吸収と実践との間を埋め、先人の経験を追体験するのに最短距離を提供するものであったのではなかろうか。文字から得る原理的理解・研究と対比してみれば、臨床の症例に現れてくる症状は余りにも複雑であろう。その複合的な症状を弁別して真因を探求する行為としての、知見と経験との間を結ぶものとして、医書や経験談の抄録は身近なものであったに違いない。的確な判断、見立ての良さを獲得するための情報収集の手段として、有効であったものと思われる。口述筆記の場合は、師匠の口吻そのままであることが、弟子が仰ぎ見る指標としての文字化であるから、近世では学芸や遊芸を問わず、それ自体が大切なことであったと思われる。

本書末尾の丁の裏には、三好理立による亡父の事歴が記されている。次の通りである。

「先考諱因長字文簾号菖軒、本姓松村氏、本州山名郡米丸村之人、為人篤実温厚而好学、遂為医子、養于祖菖澤先生、繼其業、襲三好氏、嘉永元年八月廿三日没、享年七十有五、法号涼月院菖軒日遊居士、孝子理立」

三好菖軒が浜松城下の中心地の塩町に門戸を張った医者であることは、内田旭著『遠州の先賢 浜松 村尾元融』にみえている。これによれば、三好菖軒は村尾姓から高部姓に復した高部玄晏の最初の師匠であった。遠州地方の医学における学統と師弟関係を知る上で重要な資料が、今一点追加されたことになる。

- 36 傷寒弁証 上中 2冊 縦 写本 信濃浅田惟常(宗伯)著 筆写者不明
書誌 上卷には、著者の自序(嘉永6年)、上巻目次、上巻(頭痛から不得眠まで)が筆録されている。中巻には中巻目次、中巻(煩から吐涎沫まで)が筆録されている。上中巻ともに朱点が付けられ、且つ脱落文が朱筆で補われている。本文と朱筆とは同筆とは思われないが、未考である。

本書名では小曾戸本にみえない。小曾戸本19(12)参照。

- 37 家法難波骨継秘書 上中下 1冊 縦 写本 岡道振著 平安 山中定寛筆写

寛政5年筆写（跋文）

書誌 本書には「羽州大泉亀城下にて 岡道振写之」とした序文がある。
鶴岡城下において写本を作成したわけであるが、その序文の大意は、著者が難波家に窃かに身をやつて家僕となって住み込み、苦心の末、その医業を知るに至ったが、全貌には遠い、としている。その間、刑死体を海浜にさらして骨格を観察したこと数度におよぶが、筋絡は失うところ多くて精確を期しがたく得心できない。しかし、情を通じてその家の婦人の便宜を得て、秘書と薬方を入手して得るところがあった。しかし、臨床的な修練を積みねばならない、としている。

ところで、『国書総目録』では明和7年の写本を登録しているが、本書は寛政5年に筆写されたものである。すなわち、奥書には次のように記されている。

「難波骨継秘伝」という本書は実は山中定寛が杉田玄白から借り出して筆録したものであるという。杉田玄白が指摘するような疑問点はあるものの、難波氏の医業が和蘭医学と符合していることを賛嘆している。全文は次の通りである。

難波骨継秘伝一書就鶴斎杉田先生恩借、月余因謄写以蔵于家焉、蓋此書也
難波氏家伝秘書所不肯出者、或者欲得之好事、彼家竊写一部、以去是以伝先生家、云暑中所説雖間有謬妄、然而至其關節之細則与阿蘭所言符合者、亦不尠矣、其中図説齟齬可疑者意伝写之派也、已故交互参照而可的知其誤者、稍々正之吁呼、難波氏之術業之精固可觀於此、而或恵後学之切亦不浅、今其各家不伝、可勝惜哉、寛政五年癸丑季冬日、平安山中定寛蔵

本書には挿し絵があるが、その人物画の着衣と頭髪は日本人の風俗である。その点から見ると、浜松出身の二宮彦可著『正骨範』にみえる中国風のそれとは趣を異にしている。また、難波氏の医業を評価する場合に、和蘭医学を基準にして杉田玄白の言説に信をおいているところが注意されよう。（鶴斎、杉田玄白の号）

- 38 救縊死法 1冊 縦 写本 大本 筆写者不明
書誌 漢方医学に基づくものであることは、その挿し絵によって推定される。
本書名では小曾戸本にみえない。
- 39 金瘡経絡書 一 1冊 縦 写本 筆写者不明
書誌 内題「金瘡之口伝」、蔵書印二顆のうち、「荒木氏」、他は不明
本書名では小曾戸本にみえない。
- 40 紅毛油水製法伝 1冊 小本 写本 吉雄永章訳 長崎成季館育萬蔵
書誌 吉雄耕牛の編纂書であり、「蘭学事始」でいうところのいわゆる「伝書」である。筆写者は奥書にある「文化四丁卯冬十月、聴嘶亭主人云」とある人物であろうか。その人物については不詳。
- 41 黄花堂舌法 1冊 縦 写本 大本 橘南溪著 左竹玄益筆写
書誌 本書名では『国書総目録』にみえない。本書には舌徴候図23図を収める。奥書に「文政五壬午四月中旬、勢州安濃部於連部、左武玄益写之」とある。
- 42 医事談 1冊 縦 写本 田中信蔵著 「高保写」
書誌 内題外題共に「医事談」であるが、序文には「医事譚序、魯堂撰並書」とある。本書は序文によれば安永8年に成立しているが、本書名では『国書総目録』にみえない。筆写者は「文化三丙寅冬十一月、高保写」とあるのみである。

- 43 恵美丸散方 1冊 縦 写本 恵美三白著 筆写者不明
 書誌 本書末尾には「丸散方大尾」とあるが、内題の「恵美丸散方」に従う。恵美三白の著作の一部を題するものであろう。本書名では『国書総目録』にみえない。
- 44 瓊浦本川先生口授 1冊 縦 写本 本川如弘述 筆写者不明
 書誌 本書表紙には付録として「蘭人四十一方 焼薬之口伝」を記している。本書の標題、あるいは「本川」姓の医者が関与する書名は、『県立長崎図書館郷土資料目録』、『市立長崎博物館志料目録』、『国書総目録』にはみえない。管見の限りではあるが、『医学古書目録』（日本医学文化保存会刊）に「本川糟春流膏薬方」の名称がみえ、まさにカスパル流医学伝書であろう。本書と同系統の転写本かもしれない。
- 本書の筆者不明の序文には、カスパル流医学の師承が述べられている。すなわち序文によると、カスパル来日を正徳五年（1715）とし、その後、蘭人ヤンの渡来もあり、その通詞猪俣伝兵衛、その子の伝四郎がその医学を修得した、とする。
- その弟子が山口寿斎、堀意半、内田勝左衛門という。また、猪俣伝四郎は向井玄升にも就学して升順と号し、カスパル医学を翻訳した。その後、この師承は中絶していたが、川口良庵がカスパルとヤンの療法を復活し高原道琢に伝えた。この高原道琢に就学したのが、すなわち、序文の話者、本川如弘であり、その弟子の筆記に係るのが祖本となり、それより転写したものと思われる。それかあらぬか、序文の文章は流布過程で分かり難い表現となったものと思われる。次の通りである。
- 阿蘭陀外科ノ元師カスハルト云者後光明院ノ御宇正徳第五ノ年初瓊浦ニ渡海ス為上意到東都其時ノ通詞猪俣伝兵衛也此ノ伝兵衛東都ニテカスハル治療数多アリ応手ニ無不治云コト因テ隨身ス其ノ嗣子伝四郎モ治療ヲ能シ西崎ニ有聲名其後ヤント云蘭人渡海ス是モ外科甚工ニシテ能ク治療ス其ノ子葉山口寿斎堀意半内田勝左衛門等ナリ自是シテ蘭人ノ治療漸々ニ倭国ニ相伝其頃向井玄升ト云学医アリ伝四郎隨身シテ号升順トカスハル伝ル所ノ蘭書和解シテ為一部ノ書伝子弟子中興衰微シテ行者少シ其後川口良庵ト云医専ラ治療行ルカスハルヤンノ伝書ヲ得テ施治ヲ無不應其後高原道琢ニ伝予聞其名ヲ從僕津来道琢ニ隨身テ委ク相伝ス西崎ニテ専ラ治療ス因テ永ク西崎ニ居住シテ子弟子ニ伝ルト云々
- ところで、カスパルの来日は、『蘭学事始』の本文では寛永20年の南部漂着説が記されている。他方、杉田玄白は「また別にカスパル姓の外科渡来」も推定している。今日では、その岩波文庫版の注によって知られるように、カスパルの長崎着船は、慶安2年（1649）と理解されている。なお、カスパル・シャムベルゲルについての最近の研究は、九州大学ヴォルフガング・ミヒヤエル教授による「日本医史学雑誌」（36巻3号、41巻1号、42巻3号、同4号）所載の論文があり、日本滞在期間は慶安2年から同4年であることが実証されている。
- 右に挙げた本書序文中に、「後光明院ノ御宇正徳五ノ年」というのは明らかに誤記であり、後光明院の年紀は正保である。正保と正徳との錯誤であろう。正保5年は慶安元年であるから、今日の通説に近い。しかも、南部浦に漂着して江戸に送られて以後に長崎に回されたのではなく、長崎に到着してから江戸に下ったことが明記されている。その点でも『蘭学事始』の記事と明らかに異なる。また、通説では通詞猪俣伝兵衛を経由した伝書の流布を採用しているから、本書の序文は再考してみる意味もあろうか。

本書には片仮名表記の処方が記載されているが、所々に朱筆にて、実効性の有無についての伝聞、その施術者の氏名、患者の症状、処方用量目、舶載品の稀少性などの記事がある。

その幾例かを挙げ、朱筆部分を（ ）で括ると、

ヲ、リウン （今不用）

虫 五十目、板脂 十五朶、松脂 十五朶、乳香 八朶、鬱金 三朶、
 薰陸 十五朶、
 性温 硬肉耗散痛去跌撲良

スタンコロスト （湯撥火瘡初以童使能洗貼此膏度々得効）

光丹 四十目、鱗血 五朶、辰砂 五分、椰子 五朶、マンテイカ、白虫、
 各二十目

主治金瘡諸瘡愈

本川如弘先生修蒸薬

紫葛 去皮細末十朶（或三百目）、蕎麦粉 五朶（百五十目）、
 肉桂 二朶（五分）、丁香皮 五十目）

右熱湯ニテ煉付ル或醋酒生姜汁臨病斟酌、（紫葛四月ニ根ヲ取ル形如山芋
 葉似葡萄田舎ニテ丈カネプト云類葉多シ深ク可考）

主治寒湿風症或跌撲甚外冷テ痛ヲ能温補ス下ニハシリコンヒクルマン敷事アリ

○先生常ニ用度々有応ヲ見ル

（丁香皮近来不持渡有稀者至テ貴シ信肉桂ヲ可也）

赤脂膏

（牧川道伯伝度々試得効故記）

奇良煎方

奇良 二十目

右水五合煮取三合再以三合煮滓取二合、又以水三合煮取一合和合一日服尽
 五宝散珍珠代石決明用随病氷片減

（本川春泰専以是方上部之結毒得応功見数）（極細末難服量目二朶）

高原道琢製寿妙丹 （試而度々得効）

主治産後一切諸痛或気点積痞舟酔食傷風邪腹痛其外諸病

甘草 十朶、紫旦 同、胡椒 八朶、沈香 同、鬱金 三十目、
 人参 八匁、阿仙薬 三十目、

右各末為丸食傷腹痛塩湯風邪生姜入煎服其外白湯ニテ用

此薬声崎陽其子孫医業絶此一方売薬シテ為産業今ニアリ

右に摘記した箇条は医史学の上で、本川如弘と本川春泰との関係を含めて、師承の系譜作成、治療上の試験行為とその評価、伝聞ながらも知見の公開、処方上の定量的固定による製薬業の成立、などを考察する上で、重要な史料であろう。

45 薬徴 上中下 1冊 縦 写本 吉益東洞著 筆写者不明

明和8年、吉益為則（東洞）自序 天明4年、吉益猷（南涯）跋文
 天明5年、吉益辰「東洞先生著述書日記」

書誌 丁寧な写本である。序跋および「東洞先生著述書日記」も筆写されている。この全文

に紺字で句読点が付けられ、数箇所の訂正個所に胡粉を用い書き直しがある。

著書完成から時間を経ての刊行になったのは、その生前には吉益東洞が出版を許可しなかったからである。その間の事情は跋文に、次のように記している。

(上略) 刊行何急、世所刊之書、後欲廃者、往々有之、皆卒然之過也、薬論者医之大本、究其精良、終身之業也、今刊未校之書、伝乎不朽、為人戮笑、寧蠹滅於置中、終不許焉、(下略)

これによってみれば、吉益東洞は完全主義者とも言えるであろう。死後の天明5年に刊行された(3巻3冊)。なお、吉益東洞には「薬徴補義」(7冊)があり、長男の吉益南涯には「薬徴」に関する著作、「薬徴口授」「薬徴考」「薬徴弁」「薬徴本功」(『国書総目録』)、「気血水薬徴」(小曾戸本)があるという。

小曾戸本 652 (381)

- 46 外科病論 向井家伝書 諸家名方集 1冊 縦 写本 大本 筆写者不明
書誌 三編ともに序跋なし。「外科病論」には「一癰疽」から「百六癩瘡」までを収める。これには全文に朱筆で句読点、ならびに追加文がある。たとえば、「四脱疽」には、「有瓊浦医時患人二竟喪命」とある。医者の人名はみえない。

「向井家伝書」(外題)は内題として「西崎典校向井家伝書」とある。五十七条の処方が記されているなかに、固有名詞としては、「笹山家伝コテ療治蒸薬」「香煎方、家君吉田盛芳院伝」「无凱先生秘薬」がある。

「諸家名方集」には三十七処方が記載されている。その中でも「丹毒療治相伝由来」は長文である。固有名詞としては、「癩瘡良薬」に「細川越中守様秘方」、「相伝、江州大津扇屋関湖南亭」があるのみである。後者の標題は処方として意味不明。

本書の空白に所持者の筆跡と見られる数例の処方の書き込みがある。また本書大尾の丁に、「拙者家内上下宗旨相改申候覚」があるが、浄土宗と書きながら寺院名称の記事はない。しかも一人も実名記事がなく、雛形めいている。ただし、年紀は「文政七年甲申三月十八日」の記事がある。

- 47 古医腹診徴解(断簡) 1冊 縦 写本 遠陽浜松 和久田寅撰
書誌 わずかに十一丁であるが、本文中には「東洞先生曰」が頻出する。そのほかに、「稲葉先生」がある。また、筆写者自身がいう「寅按」という箇条がある。断簡が惜しまれる。

- 48 家法部位図 1冊 縦 写本 筆写者不明
書誌 四十八箇条にわたり項目をたて、説明しているが、「食滞」の説明中に、「凡脈ヲ診スルハ其象ヲ取ヲ第一トス譬ハ川ノ流ニ星ノウツル如シ猶聖人ノ易ヲ立玉ト義同シ医ハ意也スベテ意ヲ以テ其象ヲ向ヘ取ルコト家伝ノ秘事ナリ」とある。

しかしながら、この「家法」、「家伝」というものに対して異議を唱えている箇所、自己の見解を述べた箇所などがある。

全文を通して朱筆の書き込みがあるが、たとえば、「寒、寒ハ緊脈ヲ見ス譬ヘハ花火線香ノ立シマイニ出ススキノ如クスイスイト細ク見ル」の箇所で、花火線香の例証について、「コノ譬不可也緊急ノ意ヲ欠ク」という朱批がある。

またたとえば、「脚気」の箇条では、「衝疝と脚気衝心トハ別ナリ脚気ハ一種ノ腹候アリ詳察スベシ」などとある。

つまり「家法」の記述に対して自己の見識で朱批を加えたと考えられる。筆写者不明

であるのが惜しまれるが、もとより山内家との関わりについても不明である。

- 49 (処方集) 1冊 縦 写本 筆写者不明
書誌 本書地部の小口書きには二字の文字がある。正確には判読しがたいので、仮題としておく。本文一丁表に「遠州刑部村産 内山三平所持」という書き込みがある。刑部村の内山家とは、白州村高部玄晏の三男玄育が養子をした家であると思われる(内田旭『遠州の先賢 浜松 村尾元融』)。

さすれば、内山三平なる人物の生没は不明ではあるが、永田村の村尾多聞に就いて学ぶ可能性があれば、山内弘達との交友関係があらうし、山内蒙済の許で修業する可能性もあり得る。いずれにしても村尾留器「三省録」の代診記事にみえるように、年代を越えて親戚関係の中での相互の医学修業があるとすれば、本書が山内家の蔵書の中に存在する必然性はあろう。

要するに図書の貸借関係があることは、言うまでもなく、師弟関係を始めとするさまざまな人間関係の上で、医療知識技術の伝達と定着過程を示す一要素であらう。

- 50 文林摘芳 医林摘芳 1冊 縦 写本 遠江 山愛履仁(里仁)筆写
書誌 筆写者の実名は不明。前者には「履仁」、後者には「里仁」とかき分けている。「文林摘芳」「医林摘芳」という書名は『国書総目録』にはみえないから、この「山愛履仁(里仁)」なる人物が命名した書名であらう。

「医林摘芳」の冒頭には「傷寒」が置かれている。その箇条には、「叢桂亭医事小言、原南陽先生口授」とある。以下の文章は書き言葉ではなく、「口授」らしく平明な話し言葉で表記されている。「叢桂亭医事小言」は小曾戸本451(263)参照。

- 51 (処方抄記) 1冊 縦 写本 山内軍之筆写
書誌 筆写者不明ながら、裏表紙に「Yamauchi」の署名があるから、山内軍之であらう。本書には「売薬利潤概則」(全二条)が収録されている。前文には資生堂との契約、薬品納入と支払い方法、利潤等が記されている。明治期の医家経営の一端が知れよう。

- 52 満任屈氏講義 外科書 1冊 縦 写本 山内軍之筆写
書誌 表紙に「筆記 G.YAMAUCHI」の記事がある。本文は破本で、僅かに37丁のみ。

満任屈氏とは、Manning, Charles James のことで、在日期間は明治3年(1870)～明治13年(1880)である。(参照図書宗田一、蒲原宏、長門谷洋二、石田純郎編『医学近代化と来日外国人』、158頁、世界保健通信社刊。ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』、142頁、162頁、小学館刊。なおまた、東京府病院については、『順天堂史』上巻によれば、佐藤尚中の宮内庁への建白書に基づくものであることが記載されている、644～649、671、718頁参照。

- 53 満氏外科 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 黄色表紙装丁。これは端本にて1冊のみ。題簽に「筆記」の文字があるが、山内軍之の署名はない。本文冒頭は「頑性潰瘍」とあり、後半は「副睾丸炎」の記事であり、「付」として、「予カ説ニ由レハ梅毒ヲ治癒センニハ」とした口述を記している。なお満氏とは、満任屈、すなわちマニングの略称である(「満任屈氏講義外科書」書誌参照)。

- 54 解体学 自第六編至第八編 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 表紙無し。本文用箋と同じ用箋を表紙とし、そこに「中山先生訳述、山内軍之筆記」とあり、さらに「hartshone」(ここでは誤記、ただし、後筆で上部にrが補筆されている。正

しくは、Hartshorne)の記事があるから、この原著は先記の「ハーツホーン」の訳書の一環であろう。本文最初の項目は「血液循環器」とある。

- 55 解体学 第九編ヨリ第十二編ニ至ル 1冊 縦 写本 小本
書誌 表紙無し。表紙は本文用箋と同じ。表紙に「東京府病院 教官 中井常治郎訳述受業生山内軍之筆記」[hartshorne]とある。裏表紙に「送盟兄鈴木氏」と題する戯文の墨書草稿(漢文)があるが、著しく手ずれを呈し判読しがたい。
- 56 解体学 従第一編骨論至第五編泌尿生殖器 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 裏表紙には「府下病院内舎生山内軍之」とあり、裏表紙内側には「浜松県下第壹第区七小区 敷知郡新橋村四百五拾九番地 山内軍之」とある。用箋は上記の「解体学」と同じ。原著者「乞治呵氏」とは、「ハーツホーン」の略称であろう。
- 57 薬物学 一 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 黄色表紙装丁。用箋は「満氏外科」等と同様のものを使用する。内題には「カルロット氏薬物学、原本西洋紀元一千八百七十四年、於東京府病院 教官 藤田正方訳述、生徒山内軍之筆記」とある。題簽にはカルロットとして、「瓦尔魯篤」の略称が書かれている。
- 58 軍事外科心得 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 黄色表紙装丁用箋は「満氏外科」等と同様のものを使用する。本文冒頭に掲げられた内題には、「軍事外科心得、明治十年三月十六日西郷氏暴挙ノ為ニ当舎生徒戦地ニ趣クニ当テ、教師 満任屈氏述、訳官 北地精一訳講、受業生 山内軍之筆記」とある。この記事は医学教育と政治との関係、外国人教師に期待されたこと、その滞在期間などを考える上で重要なものと思われる。「講筵雑誌」(No 16)参照。
- 59 生理学(端本) 4冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 黄色表紙装丁用箋は「満氏外科」等と同様のものを使用する。本文冒頭に掲げられた内題には、「ダルトン氏生理学、於東京府病院 工藤晋平訳述、山内軍之筆記」とある。題簽には、「ダルトン」(John Call Dalton)として「達尔頓」の略称が記されている。端本ながらその内訳は次の通りである。
- | | |
|---------------|---|
| 自第一誘導至第二近成分 | 一 |
| 自第三成分論至第五食物論 | 二 |
| 自第七吸収篇至第十脾臟篇 | 四 |
| 自第一章至第四章 神経系統 | 八 |
- 60 生理学(端本) 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 表紙無し。用箋は上記の「生理学」とは異なり、無罫である。表紙には上記の「生理学」で使用した同一の罫紙をそのまま使用している。
- 本書の内容は、表紙に「第六章各異感能篇ヨリ」と記されているが、第1丁目が破損しているように思われる。裏表紙内側には次の記事がある。すなわち、「生理学、米國達兒頓氏著述、皇國 工藤晋平 同 粕川有信訳稿、山内軍之筆記」とある。訳者は工藤・粕川の両名である。
- 61 大阪府病院方符業録 1冊 縦 写本 小本 山内軍之筆写
書誌 裏表紙には、「明治十七年甲申暮夏 静岡県下遠江山内軍之」とある。本文冒頭には「方符、海軍中軍医監大阪府病院院長 従六位 吉田頭三先生述」とあ

る。全部で89条あって、水剤之部（1～25）、丸剤之部（26～38）、散剤之部（39～46、内47、48は無記事）、含嗽之部（49～53）、灌腸剤之部（54～57）、点眼剤之部（58～65）、外用薬之部（66～74）、膏薬之部（75～82）、薬湯之部（83～84、内85は無記事）、皮下注射薬之部（86）、座薬之部（87～89）である。

また、「大阪府病院薬局方符抜粹」「鉱泉入浴法方」「発句63句」「明治二十年三月五日静岡大務新聞第二千七百五十九号、蕪蕪粉ノ効用」「明治十七年七月二十三日此花新聞八百三十六号ヨリ抜（狂犬咬傷手当の記事）」等が記載されている。

本書の自署から明治17年には実家に戻っている事がわかるが、他方、山内軍之における大阪府病院勤務の職歴の可能性、あるいは吉田顕三との師弟関係の可能性なども推測されて興味深い。

注 明治22年の内務省衛生局刊行の『日本医籍』は稀覯書であるので、敷知郡・長上郡・浜名郡・引佐郡・鹿玉郡の医師名簿を転記し参考に供したい。

敷知郡 浜松宿 三好昌軒、杉山守衛、富田玄仙、木村質文、高津元慎、久野貞二、山田桂治、内藤武雄、福島豊策、内田正、内田貞二、内田万平、藤田玄嶺、中川儒忠、馬淵安蔵、向宿村 松浦良海、三島村 藤田茂斎、新橋村 山内蒙濟・山内軍之、高塚村 本多良平、篠原村 杉下台次郎、坪井村 石川良弼、新居宿 多賀須弥久・木村昌豊・清水玄春・佐藤雄二・朝倉清太郎、鷺津村 花井善吉、三ヶ日村 梶正・梶俊、摩訶耶村 阿部玄岑、新所村 内山清、入出村 久保田謙二、佐久米村 津田震斎、和地村 牧田公斎、白須村 高部哲、宇布見村 内田貞三・内田震哉、神ヶ谷村 宮下観哉、天神町 永田優

長上郡 下石田村 木村東庵・佐藤青雲、市野村 加納泰寿・市野文鼎・市野松庵、下飯田村 中西健次、金折村 佐野玄哲、東美蘭村 渥美周平、有玉村 本間春昱、小松村 村尾春洋・匂坂卷済、笠井村 松島謙助・大須賀陸平、白羽村 高部延太郎・高部留堂、掛塚村 中川国親・清水米蔵

浜名郡 境宿村 跡見玄仙・跡見輝一・跡見菅満・深田宗七

引佐郡 田畑村 杉山文桂、伊平村 野末玄察、気賀村 河合虹平・内山昂・内山徹・名倉春達、中川村 萩原元良・大橋幸夫・内山俊良、都田村 山本春敬、井伊谷村 阿形井津治・阿形純、田沢村 杉本昱誓・杉本元達

鹿玉郡 宮口村 伊藤泰順・河合成海

(以上)

付記 順天堂大学医史学講座酒井シヅ教授の主宰する「池田謙斎文書研究会」結成に参加し、数年の書状整理を了えて、月一回の研究会に出席してきた。その成果は平成元年から「日本医史学雑誌」に連続掲載して今日に至っている。ここにおいては幕末維新期の医学史を柱とし、政治・経済・社会・文化等の相互に影響を与えつつ補完しあい、また、諸矛盾を露呈していく過程を、総合的に勉強するという、その場に身を置く事が出来た。それも現在続行中であるが、幕末期長崎での医学修行、プロシャ留学、東京大学医学部初代総理、明治天皇侍医という履歴を経た池田謙斎の、公私にわたる日常生活の中で受信した書状から接近し、天皇制を確立し中央集権国家建設へと急ぐ、この時代を分析する根拠を得た事によって、史料細読の一つの醍醐味を味わっているのである。そのことから、資料入りの葛籠を抱えて、関東大震災や大戦下の猛

火を潜り抜けた、池田家ご母堂と当主の池田允彦氏夫妻には感謝の意を表したい。

他方、この研究会のメンバーは日本医史学会会員であることもあって、本稿作成においても、様々なご教示と刺激が与えられたのである。というのも、本稿が歴代にわたる医家の蔵書を整理するという、一見すると単純な作業であるかのようにみえながら、山内家が東海道という情報チャンネルに接続していることからくる日常が想定されることから、医学の師承を柱にした文化の伝播と定着過程を調査研究するにあたっては、池田家文書の研究会の手法と軌を一にしている点があるからであり、幕末維新期を貫く日本医史学研究の一事例ともなりうると思うからである。

この観点こそ池田家文書研究会での席上の、談論風発に触発されるところ大であると思っている。とりわけ酒井シヅ教授（日本医史学会常任理事）からは研究室蔵書の閲覧の便宜を供され、かつ有益な示唆も頂戴した。深瀬泰旦氏（日本医史学会常任理事）からは、特にこの原稿の細部にわたって朱批を賜り、大過無き事を期することが出来た。

末尾ながらここに再び、山内裕雄順天堂大学名誉教授に対し、また、池田家文書研究会主宰者酒井シヅ教授をはじめ、深瀬泰旦氏、遠藤正治氏、網野豊氏、斎藤美栄子氏、田中球子氏の諸氏に謝意を表したい。なお、また、本稿冒頭の『日本博覧図・静岡県』は、浜松市史編纂室鈴木正之氏の御配慮をえたものである。謝意を表したい。

（平成 11 年 9 月 2 日記）

〔1999 年 10 月 12 日 受理〕

補注 本稿校正中に『衛生談話集』（福島豊策序文、明治 17 年 1 月付）を見る機会があった。本書には中川滯忠の文章、「素人療法」が掲載されている。署名には「滯」字を充てている。『日本医籍』の表記中川僊忠（本稿 29 頁）とは異なるので、ここに補注とする。